

社会にアクセスする教育を、 人とのつながりから生み出す

早崎 史朗

現在の勤務校等
岐阜県大垣市立星和中学校

在外での勤務校／帰国年月
パリ日本人学校／2018年帰国

中学美術科において、フェンシングなどのスポーツ競技のピクトグラム制作活動を実施。パリ日本人学校時代に培っていた人脈と連携し、学校内での授業実践にとどまらず、成果物を実際に国際スポーツ大会の場で発信することを通じて、社会へのアクセスを目指した。



実践・活動の内容

大垣市立星和中学校2年生の美術科で『世界に発信！～オリンピック競技のピクトグラムづくり～』と題して制作活動に取り組んだ。制作するピクトグラムのテーマは、フェンシングを含むオリンピック種目3種類の競技である。リサーチや作品制作という授業内の取り組みを超えて、「自分の作品をオリンピック会場に展示しよう！」をキーワードに、最終目標は2020年オリンピック・パラリンピック会場での作品展示をすることに設定した。

ピクトグラム1年目の作品づくりに関わって



生徒の制作の様子と生徒作品

ピクトグラム1年目の作品づくりに関わって

2018年10月 日本F協会会長、国際F連盟副会長太田さんの来校
全校での講話と美術授業の参観



ピクトグラム1年目の作品づくりに関わって



1年目のピクトグラム制作

パリ日本人学校時代に、ロンドンオリンピック銀メダリスト太田雄貴さん（元日本フェンシング協会会長・国際フェンシング協会副会長）の訪問を受けたことから、フェンシングの世界とつながりができていた。それ以来付き合いが続いていた太田さんや、当時の東

京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会フェンシング担当のスポーツマネージャー加藤裕子さんに授業への協力を依頼。組織委員会スポーツ局のスタッフからは展示に関するアドバイスや支援をもらい、日本フェンシング協会からもサポートを受けた。太田さん自身も星和中を訪問して美術の授業を参観し、生徒たちが制作しているピクトグラムを実際に手に取って交流した。こうした人々の尽力が実り、2019年12月の高円宮杯(日本で実施されるフェンシングの世界大会)では、生徒のピクトグラムが会場で展示された。自分たちの作品が世界中からやってきた選手や関係者の目に触れたことは、生徒たちにとって大きな励みとなった。

取り組みの2年目(2019年)は、テーマをフェンシングを含むオリ・パラ種目3種類に広げた。6月に、パリ時代の友人から紹介されたパラ卓球アスリートの渡邊剛さんの来校・講話を通してパラスポーツの学びを進め、7月に岐阜で実施されたジャパンパラ(W杯)では、多くの関係者に作品を見せて、評価してもらうことができた。なかでも、日本パラ陸上競技連盟の増田明美会長から、陸上とスポーツと芸術は同じ美しいものでとても励みになる、パラスポーツの会場での展示は嬉しいという好意的な反応を得たことには、大きな手ごたえを感じた。パラリンピック会場での展示実現に、ぐっと近づいた気がした。



2年目のピクトグラム制作

3年目(2020年)は、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、ピクトグラムのテーマを「ストップ・コロナ」に変更して実施した。



3年目のピクトグラム制作

● 動画制作

本実践では、作品制作だけではなく社会とのつながりを意識している。実践を学校の中だけで終わらせず、社会にアクセスしてよりよい社会づくりを目指していくことは、授業のカリキュラムマネジメントの極みではないかと考えていた。

そのために、広く社会にアピールする動画をつくることにした。ピクトグラムプロジェクトの1年目に動画制作を発案し、太田さんから岐阜にある朝日大学のフェンシング部を紹介してもらった。地元ケーブルテレビ局の取材で知り合ったアーティスト動画やプロモーションビデオを手掛ける若いディレクターとともに、2年目に動画制作に向けて動きだした。

生徒たちが制作したピクトグラムを、制作者の名前入りで、フェンシングの選手の動きに重ねて映像化した。生徒役にはプロの役者を起用した。英語だけではなくフランス語も添えた。動画を素人の手作りではなく「プロ仕様」にすることにこだわったのは、将来、競技会場などの巨大プロジェクトで上映される可能性を考えてのことだった。どんな会場でも映えるクオリティのものを作りたいと考えた。

生徒たちは、最初は「オリ・パラ会場で展示なんて無理」「上映なんてできるわけない」と消極的な反応だった。だからこそ、日本の一地方からでも世界にアクセスできる方法があるということを示したいと考えた。こんな田舎からでも発信できる、ワクワクすることができる、君たちは世界への切符を持っていると伝えたいと思った。



動画 FENCINGPICTOGRAM “Product & Making”



評価と課題

この実践は、社会とのつながりを重視している。それによって、生徒たちは美術が社会とかかわることであり、ひいては、自分たちにもこんなことができる、さらに世界に発信していけるということを実感できる。しかし、それにはどうしても時間がかかり、年度内に完結することができないといった学校の美術教育に落とし込む難しさがあり、生徒たちへのフィードバックも課題だと思っている。

2020年東京オリンピック・パラリンピックは、新型コロナ禍で延期となった。生徒も私もそれを目標に取り組み、関係者も尽力してくれてようやくそれが実を結びかけていたところで、これから全国の教員にも声をかけて活動を広め、各地の子どもたちにも参加してもらってともに成功体験を味わおうと考えていた矢先のことだった。まるで最後で足をすくわれたような衝撃だった。それまでに各方面と協働しながら進めてきたプロジェクトはすべてストップし、2021年の延期開催では様々なことが白紙に戻り、結局子どもたち

の作品が会場を飾ることはできなかった。

動画は狙い通りのスタイリッシュな仕上がりとなり、とても好評だった。しかし、2021年のオリンピック・パラリンピック会場で流れることはなかった。日本フェンシング協会は趣旨に賛同して実現に向けて動いてくれたが、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は、他競技や他団体との公平性の観点から、一団体の作品をオリンピック会場で流すことはできないという判断をした。

しかし、この動画放映についての案件が、多くの人々の応援のもとでIOCに届き、検討のためのテーブルに載ったという事実は大きい。目標には到達できなかったが、そこまでの過程に価値があった、美術が社会にかかわることの一つの形を示すことができたと考えている。



実践に至った経緯と提言

在外校勤務経験を持つ先輩教員の見識の広さに触れて感銘を受けたことがあり、自分も海外で教えることが人生にプラスになるのではないかと考えていた。念願かなって2015年にパリ日本人学校に赴任した。

世界から日本を見て、様々な人にふれるのは貴重な経験だった。またルーブル美術館やオルセー美術館など、フランスの文化資源を題材にした授業をつくった。在住日本人との交流もあり、特にその後の人脈を大きく広げてくれる人物と巡り合ったことはとても幸運だった。



パリ日本人学校での取り組み 美術館研修、交流学習、体力向上ダンス

2017年12月頃、パリ在住の旧知の日本人から、太田雄貴さんがパリで開催されるワールドカップ前に日本人学校訪問の希望を持っているという話を持ち掛けられた。同じ頃に文部科学省を通じてオリンピック・パラリンピックのマスコットキャラクター選定の授業の取材申し込みがあった。太田さんは東京オリ・パラ誘致の立役者の一人でもある。そこで、これらを合わせて授業を作ることを考えた。

2018年1月19日に来校した太田さんには、全校児童生徒にフェンシングに関するレクチャーとオリパラマスケット選考会、中学部に向けてキャリア教育として進路講話をしていただいた。さらに翌々日、日本人学校児童生徒と保護者有志の約50名でW杯会場に出向き、大きな声援を送った。このことが、その後の太田さんと私のつながりをさらに深くし、星和中の実践へとつながっていった。



パリ日本人学校での
オリ・パラマスケットキャラクター選出と
太田さんとの交流

帰国後は大垣市立星和中に着任。すぐに美術科でピクトグラムの取り組みをはじめた。

2018年夏に太田さんから連絡があり、フェンシングの大会に向けて応援エールを作っ
てほしいと依頼を受けた。パリ日本人学校の派遣教員仲間呼びかけて「創造的破壊
Creative Destruction」をテーマに新しい応援をつくりあげ、12月9日にフェンシ
ング全日本選手権大会で披露した。この活動は創作活動としてもとても有意義なものだと実
感し、今後さらに活動していきたいと考えて、日本に在住しているパリ日本人学校の職員、
児童生徒や保護者に対して、「間もなくやってくるオリンピックを見据え、ワクワクする
未来を一緒に作りましょう」と呼びかけて「同創会」を結成した。

同創会の活動はその後も続き、2019年の高円宮杯フェンシングワールドカップ東京大
会、アジアフェンシング選手権大会、第72回フェンシング全日本選手権、さらにその次
の高円宮杯と、実績を積み重ねている。これも、パリ日本人学校でのつながりから生まれ
た大きな財産である。

現在の教育現場は働きづらく、面白くないことも多い。校則問題や保護者対応などに翻
弄され、せっかく教員になった若い人が「先生ってこんな仕事？」と落胆してしまいかね
ないと危惧することもある。しかしそれを乗り越えて、教育を明るく楽しくやっていき
たい。働き方改革が叫ばれる昨今だが、勤務時間短縮などの物理的な形にとられるの
ではなく、仕事の本質を見つめて取り組み方そのものを見直していく必要がある。それが授業
現場を離れ、プレイングマネージャー的な立場になった現在私がやるべきことだと考えて
いる。

海外の教育施設で働こうと志願し、行動力でその夢を叶えた派遣教員は、国外から日本
の教育を見て考えるという得難い経験を積み、また世界で活躍する日本人と出会い、学
ぶことができる。これは、大きな強みである。

帰国後の私は、つねにこの経験を生かそうとする姿勢を持ち、何事も必ずできると信
じることから始めた。その結果、多くの得難い友人知人の協力を得て力を発揮でき、様
々な実践ができた。そして、学校の枠を超えて、社会とのかかわりを持つことができた。
生徒たちに、美術は生きること、そして社会の役にたっていることをわかってもらいた
いという願いに、少し近づくことができた。

人とのつながりをつなぎつなげるのが私のモットーで、まず自分自身がそれを教育活動に活かそうと思ってきた。今後は、私をハブにしてみんながどんどんつながってほしい、そのためのボンドであり糊になりたいと思っている。

自分のやり方に固執している 40 代 50 代の教員に無理強いしようとは思わないが、若い人ややる気のある人は様々な可能性や選択肢を見つけてほしいし、その手伝いをしたい。そして、一緒に明るい日本、ワクワクする未来をつくっていきたい。私が必要とあらば、いつでも声をかけてほしいと願っている。